

令和2年度 特色ある教育・経営の取り組みを行う私立学校の事例集

相互通行型授業を实践した 6年間の手応えと評価

学校法人戸板学園
三田国際学園中学校・高等学校

三田国際学園中学校・高等学校

三田国際学園中学校・高等学校は、東急田園都市線用賀駅（東京都世田谷区）から徒歩5分の清閑な環境にあります。

同校は、大正5年に教育者の戸板関子女史が、東京都港区芝に開設した三田高等女学校を起源としています。戦後は、戸板中学・女子高等学校として女子教育の発展に寄与し、平成5年に現在の地に校舎移転、そして平成27年に共学化すると共に、現在の校名に改称して新たなスタートを切りました。

中学校は、本科、インターナショナル、メイカルサイエンステクノロジーの各クラス、高校は、本科、インターナショナル（スタンダード・アドバンスト）、メイカルサイエンステクノロジーの各コースにて構成されており、特長あるカリキュラムを実施しています。

平成27年以降は、開校以来の校訓である「知好楽」の理念を発展させた、5つの力と12のコンピテンシー（能力・行動特性）、相互通行型授業を通じた「世界標準」の中高一貫教育を実践しており、今年で6年目を迎えます。



三田国際学園の校舎外観

【学校改革と学園長の招へい】

同校は、創立100年を迎える平成25年当時、これまで続けてきた女子教育に、時代の変化にあわせた見直しと改革が必要だと考えていました。

その学校改革を大きく前に進めるきっかけとなったのが、現在の学園長である大橋清貫氏の招へいでした。

大橋氏は、ライフワークとして対話を重視し、前任校で多くの保護者との面談を実践していました。その面談の経験から保護者が子どもに求める人物像の変化、その要望に応えられていない学校教育の現状を感じ、教育の変化が必要と考えていました。結果、大橋氏

が辿り着いた学校像とは、世界中どこでも生きていける素養を習得し、これからの国際社会で求められる資質を伸ばす教育が実践できる場でした。当時の学校法人戸板学園の理事長が、大橋氏のこの考えに共感し、大橋氏が描く教育改革を同校で実現すべく迎えることができました。

【原点回帰と新たな教育への改革】

三田国際学園の新しい学校像は、戸板学園の教育理念の原点である「社会に、そして人類に貢献できる人材の育成」に立ち返る「共創」を教育思想の中心に置いて、構築することとしました。

具体的な実践方法としては、トリガークエストジョン（授業のテーマとなる問い）を起点として展開し、ICTを活用した相互通行型授業を導入することとしました。これを実現するために、自由な発想や論理的思考を含めた考える力、伝えるためのコミュニケーション、世界の人々に伝えるための英語、思考を支えるサイエンステラシー、ICTリテラシーという5つの力を必須能力に設定しました。

このような、教育理念・教育思想・実践方法・必須能力からなる新しい学校像を構築し、学校改革を進めました。

改革は、教職員との対話を重視しました。大橋学園長から提示された、大学進学実績向上を目的とした偏差値教育からの脱却に、教職員間で生徒が集ま

らないのではという危惧があったからです。長きに亘る議論ではありましたが、教職員が新しい学校像を共有すると同時に問題意識を持ち、改革に一丸となって取り組むことができました。



【広報活動の反応、そして変化】

改革は、周知されて初めてその意味を持ちます。大橋学園長就任1年目の平成25年は、保護者や進学塾からの手応えは感じられず、志願者数も変化しませんでした。しかし、新しい学校像と教育方法の広報活動を継続したところ、賛同する保護者に改革内容が徐々に周知され、平成26年の説明会から参加者が増えていきました。この変化について、広報部長を兼務する今井誠教頭は、次の3点に取り組んでいくことを直向きに広報し続けたことにより、進学塾や受験生、保護者が同校の改革への本気度を感じ、共感してくれたからではないかと分析しています。

1. 女子校から共学校への変更

同校の前身の戸板中学・女子高等学校は、開校以来、女子教育で社会に貢献

をしてきた中等教育機関です。しかし、この先の100年間の教育を検討した結果、多様性溢れる国際社会で活躍できる人材を性別関係なく育てたいという想いから、共学化を決断しました。

2. 校名変更

校名変更は、原点回帰と新しい教育方針の2つを包含しています。新校名は、創立時に掲げた「時代に適応した実学」への立ち返りを明示すべく、開設時代の校名から「三田」の2文字を、国際化時代に即した実学の間であることを示す「国際」の2文字を採り、組み合わせるものです。「三田にたちかえる」ことを企図した校名変更と同窓会の賛同が得られたことは、学校改革の大きな後押しにもなりました。

3. 国際化の実践

中学にインターナショナルクラス、高校にインターナショナルコースを設置し、外国人の専任教員による副担任制や、海外大学への進学を相談できる体制も構築しました。

【相互通行型授業の実感】

平成27年4月、戸板中学・女子高等学校時代からの生徒に新入生を加えて、三田国際学園の教育が始まりました。

当初、新しく作り上げた教育が生徒たちを本当に刺激するか、学びにつながられるのかなど、教職員が抱いていた不安は杞憂に終わりました。生徒たちがトリガーアクションによって好

奇心を刺激され、自ら考え調べたものを、互いに意見として伝えあい、議論を深め、結論をプレゼンテーションする過程を繰り返すうちに、考える力を身に付け始めました。考える力を生かして、多様な価値観や知識を吸収し、個性を育み潜在力を引き出された生徒たちが、世界中どこでも生きていける素養を習得しはじめた様子から、教職員も手心えを感じるようになったからです。

これまでの取り組みを振り返り、今井教頭は次のように教育効果を実感しています。「ICTを活用した相互通行型授業は、生徒たちが社会に出て何かを生み出すことに繋がります。機器を利用した表現に共感を得られることが、探究心深化のカギになる。一人でも多くの共感を得る何かを創造することが、これから重要になってくるでしょう。」



相互通行型授業の風景

【ゼミナール型授業で根付く探究心と自律】

同校では、生徒の「物事に対する探究心」を刺激するために、基礎ゼミナールや基礎研究αという、ゼミナール型授業を、本科クラス・メディアカルサイエンステクノロジークラスの中学校2・3年生を対象に実施しています。この授業から探究の面白さに目覚めた生徒は、高校進学後も自律的に関心のあることを探究し続けます。

クリエーション分野の基礎ゼミナールに所属していた生徒の中には、高校進学後も学内の有志団体で制作活動を続け、コロナ禍に活動する医療従事者への感謝を映像で表現しました。その映像は、第2回石垣島・湘南国際ドキュメンタリー映画祭で国内学生B部門賞を受賞し、生徒たちの大きな自信につながりました。

一方、基礎研究αは、高校進学後も基礎研究βで継続します。そこでは教員の手を離れ、中高生たちが一体となり自律して学んでいきます。「基礎研究」では、学年を超えた意思疎通の文化が引き継がれ始めており、この様子に対し今井教頭は「三田国際の新たな伝統になってくれれば」と期待しています。

【充実する世界標準の教育】

高校のインターナショナルコースアドバンストは、高度な語学力を養うべく、主要教科を英語で実施するカリキュラムです。本カリキュラムは、西オー

ストラリア州教育省のデュアルディプロマプログラムを導入し、修了すると同校の卒業資格と共に同州の高校卒業資格(WACE)試験の受験資格が得られます(令和3年度から実施予定)。この取り組みは、国内初となるオーストラリアとの認定プログラムで、更に同校の資源のみで構成されており、海外での単位取得が不要である点が特長です。世界標準と謳った同校の教育が第三者機関に認定され、国際化を強固なものにした一例と言えます。

【取材を終えて】

今回の取材を通じて、同校が改革に成功した要因は、主に次の5つにあると考えます。

1. 理事長、学園長、教職員の理念共有
2. 対話を重視した改革の実践
3. 5つの力と12のコンピテンシーの設定
4. ICTを活用した相互通行型授業の構築と実践
5. 生徒による学習・探究結果の発信と、それに対する学内外からの評価

また、生徒の成長する様子から、同校が新しく作り上げた教育の成果は着実に表れてきている印象を受けました。

三田国際学園中学校の一期生が令和3年3月に卒業を迎えます。同校の新たな教育を通じた生徒たちの更なる活躍に、大きな期待が寄せられます。

(取材) 私学経営情報センター